

南部藩領内における死者祭祀に関わる神楽の事例

中 嶋 奈津子

【抄録】

本稿は南部藩領内に特有の権現信仰に基づいて行われる神楽「墓獅子」の実態と現状を明らかにするものである。そのため、「墓獅子」を現行している（或いは、以前行っていた）地域 10 か所の神楽の調査を実施した。

南部藩領内では、獅子頭を神仏の化身として「権現様」と呼び、地域の守り神として信仰している。神社例大祭ではこの「権現様」を奉じて舞わせる。この祈祷の「権現舞」が一部の地域では死者の供養にかわる「墓獅子」として機能していたことがわかった。また、「墓獅子」は一定の形式があって、般若心経を唱え、加えて魔を払い清める「七つ踊り」を行うなどの特徴を確認した。1950 年代まで盛んに行われていた「墓獅子」は時代の流れとともに、墓と供養の形態の変化や信仰心の薄れに伴って依頼も減り、わずかな依頼や沿岸地域での廻村巡業で維持できている状況であることが今回の調査で明らかになった。

キーワード：墓獅子、権現信仰、獅子頭の権現様、死者供養、墓獅子の唄

はじめに

旧南部藩領内には数多くの神楽が存在するが、その中でも最も多いのが修験系神楽である。この修験系神楽に特徴的なのは権現信仰である。その地域に縁の深い神霊を獅子頭に降ろす儀式を行い、この獅子頭を神仏の化身として「権現様」と呼ぶ。これを奉じて舞う「権現舞」を中心とした祈祷の舞を神社例大祭などで奉納する。

権現舞は神事の際に奉納されるのが通常であるが、一部の地域では、神楽衆が「権現様」を奉じて死者供養を行う事例がある。これを「墓



写真 1 獅子頭の権現様
(2016 年 6 月 12 日 筆者撮影)

獅子」と呼ぶ。おそらく複数の神楽が過去に「墓獅子」を行っていた痕跡が各地に見られる。本論では、旧南部藩領のうち青森県沿岸部・岩手県北部・沿岸部の 10 か所の神楽団体の「墓獅子」

について調査を行い、その特徴を分析し、いくつかの知見を得たので報告する。

1. 「墓獅子」の先行研究－獅子頭の権現様と死者供養－

「墓獅子」の特徴は、南部藩領特有の権現信仰に基づいて獅子頭の「権現様」を奉じて死者供養を行うことであり、祈祷の「権現舞」を葬式や年忌、盆に墓前や座敷で行う。主として青森県八戸市・三戸市、岩手県二戸市・一戸市・盛岡市・久慈市・普代・宮古市に分布する修験系神楽に確認できる¹⁾。現在確認できる「墓獅子」の所在を地図1に示す。

本田安次は『山伏神楽・番楽』の「諸式」の項で、「墓獅子」について以下のように述べている²⁾。



地図1 現在確認できる「墓獅子」の所在



写真2 夏井大梵天神楽の墓獅子の様子
(2001年4月29日 久慈市撮影)

「権現祈祷の一つに「墓獅子」というのがある。これは、百日忌、一年忌、三年忌等の仏（死者）の供養に、神楽の一行が、招ぜられた家の仏壇の位牌の前、若しくはお墓の前に座して「みはかじしのうたひ」とて、以下の様な不思議な神歌を歌うのである。（略）」

加えて「墓獅子」の内容として、斐綿神楽の「常式」「八の巻」「ちらし歌（後歌とも）」、岩泉の神楽の「塚ウタイ」、中里神楽の「神楽念仏」、田子神楽の「仏前竝ニ墓所の歌」の神楽歌を紹介している。和野や田子の神楽では「七

つ物」で舞うことも加えている。

また、岩田勝は『神楽源流考』の中で「東北の鎮魂の神楽」として、墓獅子について以下の様に述べている³⁾。「陸中下閉伊郡から九戸郡・陸奥三戸郡・八戸市にわたる地域のいくつかの山伏神楽の権現舞に、権現祈祷の墓獅子（墓念仏・神楽念仏ともいう）が現存している。百日忌・一年忌・三年忌や新盆などの死者の供養に、山伏神楽の組が仏壇の位牌の前や墓の前で楽と神楽唄によって権現の獅子をまわす。」

加えて、青森県鮫の「鮫神楽」の明治45（1970）年の「鮫神楽記」を挙げて、「獅子が供養者と死霊の姿をあわせ持つ。ここには、念仏による鎮魂と神楽による鎮魂との未分の状態がみられる」と分析している。また、菊池和博は「シシ踊り鎮魂供養の研究」の中で、鎮魂供養シシ踊りの成立要因として獅子舞（権現舞）を奉じた山伏修験の関与が考えられることを述べて、成立過程に墓獅子を挙げている⁴⁾。

このほか、自治体で作成された神楽の報告書にも「墓獅子」の唄などが記録されているが、詳細について報告されているものは少ない。この中で一戸町教育委員会『一戸町の郷土芸能』と相馬福太郎『二戸の神楽』は、神楽の沿革や残される資料、墓獅子の唄などが記録されていてこの地方の墓獅子の特色を知ることができる⁵⁾。

近年「墓獅子」を行う神楽は少なくなり、沿岸部の神楽の廻村巡業の際にわずかに行われているのみであり、その実態を把握するのが難しくなっている。その中で、現行の鮫神楽（青森県八戸市）と黒森神楽（岩手県宮古市）については自治体が発行した個別の調査報告書があり、墓獅子の詳細や歌が掲載されている。とくに『文化財シリーズ16 鮫の神楽』は舞曲の構成や方法、当時把握できるすべての唄などが詳細に収録されており、鮫神楽に触れる際、重要な資料となる⁶⁾。夏井大梵天神楽（岩手県久慈市）は、保存会で独自に作成した記録誌に「墓獅子」の詳細が記録されている⁷⁾。加えて平成13（2001）年に行われた「墓獅子」の映像を保存してい

貴重な資料となる。

2. 「墓獅子」の実際—内陸部・沿岸部における「墓獅子」の事例

今回の調査で、「墓獅子」の詳細が確認できた4つの団体の事例を以下に報告する。

事例①：鮫神楽（青森県八戸市鮫町字下苗場）

【鮫神楽の概要】

聞き取り調査よれば、鮫神楽の概要は以下のようである。

「もとは修験により行われていた」というこの神楽は、早い時期から地域住民により担われており、神楽の来歴や詳細については不明である。巖島神社例大祭などで神楽が奉納される。文化13（1816）年奥書の獅子頭を含め5体を所有している。昭和10（1935）年代までは、春祈祷で門打ちを行っていた。鮫が八戸藩の港であった地域性からか、鮫神楽には上方の影響を受けた「組舞」と呼ばれる芝居の演目を多く残している。『嘉永年中 佐藤連平』の署名の神楽本が伝来して、「四方堂・権現舞」「番楽」「鳥舞」「三番叟」「翁舞」「小獅子」「山の神」「三宝荒神」など全31演目の中に「墓獅子」がある。

【鮫神楽の「墓獅子」】

盆の時期、8月14日～15日の午後には浮木^{ふぼく}寺の墓所で神楽衆が待機しており、墓参りに訪れる住民の依頼により、「墓獅子」を舞う。葬式でも依頼があれば舞う。近郊の法領田神楽（明治以降成立）も以前は「墓獅子」を舞っていたが、現在は鮫神楽だけとなった。以下、「墓獅子」の構成を『八戸の神楽』より引用する⁸⁾。



写真3 鮫の「墓獅子」（昭和初期）（鮫神楽提供）

まず、権現拍子で「歯打ち」を軽く一節やる。

次に、締め太鼓の奏法だけで、悲しみをこめて、「墓獅子」の歌を掛ける。墓前に敷いた莫蔭の上に獅子は頭を伏し、その歌に合わせて身を震わせるように起き上がる。また、静かに莫蔭の上に伏し、それを繰り返す単純な所作である。詞章に合わせて、へ茶の木には・・・では獅子が茶を飲み、へ桜木を・・・では、花を手にとって顔に寄せ、へ白銀を柄杓に・・・では、柄杓の水を飲む真似をする。なおへ酒飲まば・・・は、酒を飲まない故人には省略されている。「墓獅子」の掛け声が終わると、再び神楽拍子、へ西見れば・・・で、歯打ちを一節おこなって終わりとなる。法霊田社・矢沢での「墓獅子」は、やや違っている（法霊社 三浦氏談）。まず、そのお墓の周囲四隅に竹を立てて、注連縄を張る。はじめは別当が「般若心経」を唱える。

続いて、「東方立（家固め）」「権現舞の下舞」「墓獅子」の順で行う。そのあとは、権現舞の下舞をはじめから演ずる。歯打ちところまで舞うと、権現舞は終わりとなる。続いて、墓獅子の唄が掛かる。そのあとは鮫と同じようである。

一鮫の墓獅子 掛け唄一 『文化財シリーズ 16 鮫の神楽』より⁹⁾

東方は薬師の浄土の玉の御構や	君が開かて誰かひらかふ
西方は弥陀の浄土の玉の御構や	君が開かて誰かひらかふ
南方は観音菩薩の浄土の玉の御構や	君が開かて誰かひらかふ
北方は釈迦の浄土の玉の御構や	君が開かて誰かひらかふ
中央は大日大悲の玉の御構や	君が開かて誰かひらかふ
茶の木にはいかなる木の葉を取り揃え	天から落ちる玉の水かな
桜木を打ち割り見れば何もなし	花の種とは何を言ふらん（後略）

事例②：夏井梵天神楽（岩手県久慈市）ーセツ物と水汲み女ー

『大梵天神楽』『岩手県の民俗芸能』および、筆者の聞き取り調査の内容から「神楽の概要」「夏井大梵天神楽の墓獅子」について以下に記載する¹⁰⁾。

【神楽の概要】

夏井大梵天神楽は、久慈市夏井の若宮八幡宮の奉納神楽である（例大祭 8 月 15 日）。

修験山伏であった播磨家の先祖が大梵天不動明王を背負ってこの地にたどり着き、大宝院を建立した。播磨家の当主は代々大宝院の別当を務めたと伝えられる。播磨家の屋敷には行屋堂が建てられ、大梵天不動明王とともに神楽の道具も保管される。神楽は旧田野畑村から伝えられたという説もあるがはっきりしたことはわかっていない¹¹⁾。代々播磨家が神楽を組織した。昭和 35（1960）年まで、夏井と長内町全域、大野村の一部を霞として一年おきに旧 11 月 1 日から約 50 日をかけて各家を巡行していた。48 演目が記録として残されているが、現在はこのうち「権現舞」「獅子番楽舞」「御祈祷番楽舞」「柱がらみ舞」「利生舞」「墓舞」「ハッ祓い」「三番叟」「磐戸舞」「能舞番楽舞」「鳥舞」など 20 演目を維持している。獅子頭の「権現様」が舞う祈祷舞は 6 演目ある。以前はすべて口伝で、霞を歩いてようやく覚えたそうである。現在の播磨会長の代ではじめて神楽本を作り、記録として残した。かつて久慈市内には 7 つの神楽団体があったが、今は夏井大梵天神楽と山根神楽の二団体となった。

【夏井大梵天神楽の「墓獅子」】

「墓舞」は、お盆と年忌、葬式などで行う。神楽関係者でなくとも依頼を受ければ行う。最近では頼まれることはなくなり、最後に行ったのは平成 13（2013）年 4 月で、神楽の師匠が亡くなった時である。夏井の「墓獅子」には、黒頭巾と黒装束に身を包み、甕のついた天秤を担ぐ「水汲み女」が登場する。死者に水をあげる役割と解釈されている。甕は半紙を切って細工したものである。そして、祓い清めの舞「ハッ祓い」と共に行われる。「ハッ祓い」の祈祷道具は弓・杵・薙刀・法螺貝であり、祈祷が終わると墓に立てかけて置いてくる決まりである。神楽は東西

南北の四隅で4回踊り、盆のときは家の仏間で行い、それから墓に行く。葬式のときは墓で行う。神楽人の衣装は普段は白の上着に黒の袴を着用するが、「墓獅子」「神舞」「蒼前舞」のような特別のときには、白い袴を着ることになっている。



写真4 水汲み女と権現様
(2001年4月29日 久慈市撮影)

夏井大梵天神楽の「墓獅子」は「権現舞（墓獅子）」⇒「ハッ祓い」⇒神歌⇒御祈祷（般若心経）の行程で行われる。家で舞う時には、座敷中央に祭壇を設けて霊代を移しローソクを灯す。「権現舞」を舞った後にハッ祓いの道具を重ねておく。舞人は道具を持ち「ハッ祓い」の舞を、獅子頭の「権現様」と「水汲み女」と共に三下り舞う。終わると全員で神唄を唱えながら霊代を回る。歌の中で先導が上の句を申すと、一同が下の句を答える場面がある。最後には般若心経を唱えるが、葬式の時は「権現舞」と「ハッ祓い」のみで送り、最後に権現様を塩で清める。「ハッ祓い」は祓い清めの祈祷舞のため、新築祝いや棟上式の際にも行われる¹²⁾。

一神歌一 『大梵天神楽』より¹³⁾

ハアー 東方はや 薬師の浄土の魂の御子や 吾れ知らかんで 誰が知らそうや 誰が知らそうや ハエ
南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 阿弥陀の浄土に 阿弥陀の浄土にヤー ハエ 南無阿弥陀仏（舞人右回り）
ハアー 南方はや 観音浄土の魂の御子や 吾れ知らかんで 誰が知らそうや 誰が知らそうや ハエ
南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 阿弥陀の浄土に 阿弥陀の浄土にヤー ハエ 南無阿弥陀仏（舞人右回り）
ハアー 西方はや 阿弥陀の浄土の魂の御子や 吾れ知らかんで 誰が知らそうや 誰が知らそうや ハエ
南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 阿弥陀の浄土に 阿弥陀の浄土にヤー ハエ 南無阿弥陀仏（舞人右回り）
ハアー 北方はや 釈迦のや浄土の魂の御子や われ知らかんで 誰が知らそうや 誰が知らそうや ハエ
南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 阿弥陀の浄土に 阿弥陀の浄土にヤー ハエ 南無阿弥陀仏（舞人右回り）
ハアー 中央はや 大日如来の魂の御子や 吾れしらかんで 誰が知らそうや 誰が知らそうや ハエ
南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 阿弥陀の浄土に 阿弥陀の浄土にヤー ハエ 南無阿弥陀仏（舞人右回り）
ハアー 闇の夜にや 鳴かん鳥の声聞けばや 生まれぬ先の親ぞ恋しき 親ぞ恋しきヤー ハエ 南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏 阿弥陀の浄土に 阿弥陀の浄土にヤー ハエ 南無阿弥陀仏（舞人右回り）
ハアー 極楽のや 末木の枝になにがなるや 南無阿弥陀仏六つの字がなる 六つの字がなるや ハエ
南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 阿弥陀の浄土に 阿弥陀の浄土にヤー ハエ 南無阿弥陀仏（舞人右回り）

事例③：高屋敷神楽－三陸沿岸の被災地で供養の「墓獅子」－

【高屋敷神楽の概要】

上女鹿沢に堂を開いた修験三明院（墓碑銘 明治40年1月7日13代76歳 現在の岡山家先祖）が組織した神楽。開始時期は不明。一時神楽は衰退し、しばらくの間は「権現舞」のみとなっていたのを、師匠の高屋敷仁太郎（昭和5（1930）年の時、19歳で神楽を習う）が出稼ぎから戻ってきて復興した。神楽歌はすべて口伝であったが、高屋敷仁太郎が、それまであちこちの師

匠の間に散らばっていた神楽の歌や口上を集大成した。般若心経・神楽・翁・三番叟・曾我兄弟・若子舞・山の神・火伏の祈祷などの19演目の中に「権現舞」や「墓権現」が含まれる。『一戸の郷土芸能』参照¹⁴⁾

【高屋敷神楽の「墓獅子」】（聞き取り調査より）

納骨後、まず太鼓を叩きながら『般若心経』を唱えて、その後「墓獅子の歌」を歌いながら墓前で権現様を舞わせる。座敷の中で舞うことはしない。このときは通常の「権現舞」よりもゆっくりと静かに悲し気に踊る。歯打ちなどの音はたてない。昔は神楽と一緒に七ツ舞も行っていた。近年では、三年前に神楽の仲間が亡くなった時に行った。

また東日本大震災後、犠牲者の供養のために、大船渡市や釜石市、鶴住居で「墓獅子」を行ってきた。被災地での神楽は2年継続したが、今は被災者の方々が復興住宅などに移動されて神楽の受け入れ先がみつからず、出向かなかった。平成28年は、仁昌寺の前住職が亡くなった際に「墓獅子」を行った。神楽仲間以外でも依頼があれば行すが、依頼されるのは数年に一度くらいである。「昔はお墓が山の中や遠いところにあった。和尚さんを頼むのが大変だったので、自分たちの手で墓獅子で供養できるようにと始めた」と聞いている」とも伝えられる。

以上、「墓獅子」について3つの事例を報告したが、以下に現在「墓獅子」が確認できる（過去に行っていた事例も含め）事例について図表1に示す。

【図表1】現在確認できる墓獅子

神楽名と所在地	舞の名称	①時・場②誰のため	備考
鮫神楽 (青森県八戸市)	「墓獅子」	①盆の時期・墓前 ②依頼者	毎年、盆の時期に浮木寺の境内で神楽衆が待機している。嘉永年間の神楽本に「墓獅子」記録がある。
斗内獅子舞 (青森県三戸町)	「墓獅子」	①葬式・本堂・墓前 ②神楽衆	舞本「佛前並びに墓所の歌」がある。土葬の時代に七ツ道具を墓に埋めた。
高屋敷神楽 (岩手県一戸市)	「墓獅子」 (「墓権現」とも)	①葬儀：墓前②被災地での供養 ②依頼者	現在の唄本にも「墓獅子」の歌がある。震災後、被災地の釜石・大船渡で墓獅子を行った。墓獅子の際、般若心経を唱える。
女鹿神楽(岩手県一戸市)		詳細不明	「昔、やっていたらしい」との伝承
堀野武内神社神楽 (岩手県二戸市)	「墓づし」	詳細は不明	正元1年・寛永5年・宝暦4年・天明2年銘の獅子頭を保存。宝暦13年・明治7年・昭和41年銘の唄本を所有。このうち昭和四一年の唄本にのみ、「墓づし」がみられる。
石切所深山神社神楽 (岩手県二戸市)	「墓獅子」	①葬儀・墓前 ②神楽関係者の亡くなった時のみ	「昔、神楽の仲間が亡くなったときの唄いに踊った」という伝承あり。大正12年「獅子舞歌本」に「墓獅子の歌」がみられる。
ハッ口神楽 (岩手県盛岡市)	「墓獅子」 「後生神楽」	①葬儀・墓前 ②神楽関係者	昭和初期の神楽唄本に「後生舞」「墓獅子」がみられる。

黒森神楽 (岩手県宮古市)	「神楽念仏」 「墓獅子」	①「オダン」と呼ばれる墓所・廻村巡業 ②①の両家の墓と巡業での依頼者	「オダン」とは、黒森（山口）の旦那であった小笠原家と別当川原田家の墓所。この墓前で神楽念仏を唱え、権現舞を舞う。
夏井大梵天神楽 (岩手県久慈市)	「墓獅子」	①葬式：墓前年忌：座敷廻村巡業 ②依頼者全て	口伝を、昭和の時代に改めて記録。その中に「神楽の墓舞（墓獅子）」とみられる。祈祷舞「ハッ祓い」の後に「墓獅子」舞う。
山根神楽（久慈市）	「墓獅子」	詳細不明	昔は、あった。神社の別当さんが亡くなった時に行ったという伝承。
鶴鳥神楽(岩手県広野町) (岩手県洋野町普代)	「神楽念仏」 「墓獅子」	①神楽念仏：座敷・墓獅子：墓前	未調査

3. 「墓獅子」の概観と目的

前述の3つの事例から、「権現舞」が死者供養のための「墓獅子」として機能していること、そして「墓獅子」の過程で「般若心経」や魔を払い清める「七つ踊り」（あるいは「ハッ払い」）とともに行われることがわかる。獅子頭の「権現様」を奉じて舞う「権現舞」は例大祭などの神事で行われるのが通常であるが、本来は神仏両面の性質を持つため、死者祭祀（供養）においても機能している。そして、「墓獅子」にはいくつかの共通点があることがわかる。これを、いつ、何処で、誰のために、の3点からまとめると以下のようになる。

・「いつ」⇒盆（8月）、葬儀（納骨後）、年忌、廻村巡業時（沿岸の神楽）

・「何処で」⇒墓前・座敷・屋外

・「誰のために」⇒神楽関係者・旦那（神楽を保護した家の墓・主人）のため、あるいは依頼があれば誰に対しても行う、の二通りある。

さらに、その他の共通点として以下が挙げられる。

(1) 儀式的流れについて

儀式は「墓獅子」⇒ハッ祓い（祓い清め）⇒神歌・念仏⇒御祈祷（般若心経）の流れで行われる。僧侶は関わらない。「墓獅子」は神楽念仏や般若心経と組み合わせて行われる。また、悪魔を払い清める祈祷舞「ハッ祓い」が「墓獅子」の後に、もしくは自宅・寺から墓所への移動時に行われる。

(2) 「墓獅子」における「権現様」の祈祷

「墓獅子」では獅子頭の「権現様」を舞わせる場合と、その場に奉じるのみで舞わせない場合がある。また通常の「権現舞」のように「歯打ち」を行なう事例と、音をたてることを控える、あるいは「歯打ち」はしない場合がある。「忌は音を立てない」ということで後者が多い。

(3) 「墓獅子」の唄について

「墓獅子」の唄はそれぞれの神楽団体によって異なるが、すべての神楽が一部共通な節を唄う。これは、本田安次が『山伏神楽 番楽』の「墓獅子」の項で述べた奥州神楽「みはかじしのうた

ひ」の常式と同様の唄である。同様の唄をハツ口神楽は「浄土の唄」としている。

4. 考察

（1）「墓神楽」ではなく「墓獅子」

神仏の化身として信仰される獅子頭の「権現様」は神仏習合の名残を残して、神事と死者祭祀（供養）の両方に機能している。「権現舞」は墓前では死者の魂を鎮め、供養する祈祷の舞「墓獅子」として悪魔を払う舞「ハツ祓い」とともに行われる。

本田は『山伏神楽・番楽』の中で「墓獅子」の流れと「七つ舞」について次のように述べている¹⁵⁾。

和野ではこの墓獅子をやはり神楽念仏と言い、七つもので舞う。権現は一人立にして二頭出る。（七つものに附く女や道化は、この時だけ出ない）座敷に机を置き、その上に位牌を載せ、この前で舞うという。（略）田子でも七つ道具で舞っていた。こちらではあらかじめ墓の四方に注連縄を張り、供物を供え、灯をともし、香を焚いておく。そこへ権現様の一行が七つ道具のうちの弓矢の者二人が出て四方番楽というのを踏み、矢を放つこの時唄われるのが左のごとくである（略）。次に東方西方北方南方中央の常式の唄になる

呪術的な要素が強く、「墓神楽」ではなく「墓獅子」の名に象徴されるように、芸能としての神楽とは異なる意味合いを持つ。なお「墓獅子」の際は、近親者だけが立ち会うことになっていて、外部者に見せるものではない。

また、「七つ物」については、次のように述べている¹⁶⁾。

これは踊りの持ち物が七色あるかららしい。これを神楽と呼んでいるところもある。（略）新築等による遷宮の式に夜、丑の刻などに松明を先頭に立て、この式を以って供奉納することがあるからである。渡仰や稀には神葬祭などにも御供することがある。墓獅子、その他にも用いる所もある。もともとは、神楽組が宿から宿へ移る道中に権現様を奉じ、この七つものの行列を以って踊り亘ったものらしい。」

同様「七つ踊り」について、森口多里は「大念仏と同じように採物の中に呪術性質を持つ棒があるが、杵をもつ組が必ずあることは剣舞と異なっている」と述べている¹⁷⁾。

今回の調査で常式や七つ物を維持している事例については、ほぼ同様に行われているが、実際に「七つ物」までできる事例は少なく、神唄に関してはすでに伝承されない場合もあり、結果、神楽拍子の打ち鳴らしと獅子頭を奉じる（あるいは舞う）というように簡素化されている。

（2）「墓獅子」の開始時期・行われていた時期について

「墓獅子」は他の演目と異なり歌が記録されているものが少ないため、神楽本による開始時期の特定が難しい。今回の調査で「墓獅子」の名称が見られる一番古いものが鯨神楽（八戸市）の嘉永年間（1848～54）の神楽本であり、当時すでに「墓獅子」が行われていたことがわかる。

近代においては、古いものは深山神楽（二戸市）の大正年間の歌本であり、担い手からの聞き取り調査を合わせて検討すると、大正時代から昭和30（1955）年代には盛んに行われていたと考えられる。興味深いのは、武内神社（二戸市）の3冊の神楽本である。宝暦13（1763）年銘と明治7（1874）年銘の神楽本には「墓獅子」は無く、昭和41（1966）年銘の唄本には「墓獅子」の名称が出てくる。これらの変遷について、明治時代以降の墓制の変遷や当時の地域社会の状況などを考慮にいった検討が必要である。

（3）「墓獅子」の唄はどこから派生したか

「墓獅子」に共通の常式が、どこから伝播したのかについて検討した。ひとつの可能性として、秋田県に伝承される「番楽」からの影響である。番楽の「翁」には「常式」と同様の唄があり、相互関係は不明であるが影響を受けた可能性がある。

「昭和拾六年八月 鳥海山古瀧番楽舞 篠原作左エ門」の「翁」には、以下の舎文がある。

先ヅ東ヲオシヲガンデ 見奉レバ 薬師ノ常燈ヤ 月高リ見エマシマス
南ヲオシ拝ンデ 見奉レバ 観音ノ常燈ヤ 月高リ見エマシマス
西ヲオシ拝ンデ 見奉レバ 阿ミダノ常燈ヤ 月高リ見エマシマス
北ヲオシ拝ンデ 見奉レバ 釈迦毘沙門ノ常燈ヤ 月高リ見エマシマス
ソラニハ白金ノ玉ノハダ 錦ノ御座所 廣ウタリ オーイ

このほか、本海番楽（鳥海町）の「弘化五申歳□□□ 獅子舞云立 師匠久七 六蔵」,「杉沢比山謡本」 「釜ヶ台の獅子舞」の「翁」でも同様である。番楽「翁」の「地を鎮めて四方の浄土を拝する」という考え方が南部藩領の神楽にも共通してあったのか、なぜそれが「墓獅子」残っているのか、とくに八戸市周辺地域と秋田県の番楽との比較は今後の課題となる。

（4）内陸の「墓獅子」が廃れ、沿岸の「墓獅子」が継続する理由

ー「墓獅子は、頼まれなければやれない」状況と廻村巡業ー

戦後、墓地が整備されはじめて共同墓地へと移行してゆく。加えて土葬をしなくなることで死者の魂を清め鎮める七ツ道具を墓に埋めるというような宗教的な儀式が出来なくなる。以降、葬式での「墓獅子」の依頼は減ってゆき、「墓獅子」自体の形式も変化する構図がみられる。そのような状況下、沿岸の神楽は廻村巡業を通して、「墓獅子」も保持できていることがわかった。廻村巡業では年忌供養の依頼が多く、それが「墓獅子」を行う機会となっている。

また、高屋敷神楽（一戸町）の事例では、東日本大震災以降、神楽衆は犠牲者の冥福を祈るために三陸沿岸地域に毎年出向いていたが、住民が仮設住宅から新しい住居に移っていったことで神楽の受け入れがなくなってしまった。これも、生活環境の変化に伴う事情であり、どの神楽からも聞かれた「墓獅子は、頼まれなければやれない」の言葉に象徴される。

（5）地域住民の生活と「墓獅子」

「昔は和尚さんを頼むのにお金がかかるのでなかなか頼めなかった」「昔はお墓が山の中にあつて遠かった。今のように自家用車もない時代は、和尚さんを連れてゆくのに大変だった」という

話を聞くことが度々ある。「なぜ「墓獅子」で供養するのか」あるいは、「なぜ、廃れたのか」について考える場合、こうした地理的な事情や近現代における埋葬形態の変遷、地域の経済状況などもひとつの要因となりうる。住民の立場に立った視点でこれらを探ることで、「なぜ墓獅子で埋葬するのか」「なぜ衰退していったのか」を改めて検討することが今後課題となる。

おわりに

修験系神楽の「権現舞」は神事の際に行われるのが一般的であるが、神仏両方の性質をもつため、「墓獅子」として供養など、死者祭祀においても祈祷舞として機能していた。神楽の祈祷舞で死者供養を行っていた背景、なぜ「七つ舞」と組み合わせるのかについて、地域に浸透する権現信仰や歴史的背景、住民の生活環境、経済的側面をさらに検討しなければならない。「墓獅子」は依頼がなければ行えない。盛んに行われていた墓獅子は時代の流れとともに、墓と供養の形態の変化や、信仰心の薄れに伴って依頼も減り、現在ほとんど行われていない。わずかな依頼や廻村巡業で維持できている状況であることが今回の調査で把握できた。

神楽の担い手は、世代交代をされていて「内容はわからないが、昔やっていたそうだ」という返事をいただくことも多い。今後、廃れ行く「墓獅子」を記録してゆくことが急務である。これまで「権現信仰」は南部藩領特有とされてきたが、近年、旧伊達藩領である北上市の大乗神楽（伍代院文書）から、死者祭祀の「クラヌシの歌」が見つかった。このことも含めて、今後広い視野での調査と検討が必要となる。

注

- 1) 県中央部に分布する早池峰系神楽や円万寺系神楽に関する報告書や筆者の聞き取り調査の中でも墓獅子を確認することはできない。神楽関係者の葬儀の際に、笛太鼓による打ち鳴らし（御神楽：みかぐら）は、神楽により行うところもある。
- 2) 本田安次『本田安次著作集 日本の伝統芸能 第5巻 山伏神楽・番楽』錦正社 1994年（復刻版）（『山伏神楽・番楽』斎藤報恩会 1942年）506頁引用
- 3) 岩田勝『神楽源流考』名著出版 1983年 316頁－317頁引用
- 4) 菊池和弘「シシ踊りの鎮魂供養の研究」2008年 東北大学博士論文
- 5) 一戸町教育委員会『一戸町の郷土芸能』1992
相馬福太郎『二戸の神楽』沢倉印刷株式会社 2004
- 6) 阿部達『文化財シリーズ16 鮫の神楽』八戸市教育委員会 1975
- 7) 夏井大梵天神楽保存会『大梵天神楽』1997
- 8) 八戸市教育委員会編『八戸の神楽』1982 21頁－22頁引用
- 9) 前掲6) 64頁より引用
- 10) 前掲7), 岩手県教育委員会『岩手県の民俗芸能－岩手県民俗芸能緊急調査報告書－』1997年
- 11) 前掲10) 60頁引用
- 12) 今回の調査では「水汲み女」の事例は夏井大梵天神楽のみである。「ハッ祓い」での清めは他の幾つかの神楽にもみられる。「七つ道具」の名称の場合もある。

- 13) 前掲7) 60頁－63頁引用
- 14) 前掲5) 『一戸の郷土芸能』 参照
- 15) 前掲2) 508頁引用
- 16) 前掲2) 499頁引用
- 17) 森口多里『岩手県民俗芸能史』錦正社 1971 1331頁

引用文献

- 1 「墓獅子」－獅子頭の権現様と供養－
 - ・ 本田安次『本田安次著作集 日本の伝統芸能 第5巻 山伏神楽・番楽』錦正社 1994年（復刻版）（『山伏神楽・番楽』斎藤報恩会 1942年）506頁
 - ・ 岩田勝『神楽源流考』名著出版 1983年 316頁－317頁
 - 2 「墓獅子」の実際－内陸部・沿岸部における「墓獅子」の事例
- 事例①鮫神楽
- ・ 八戸市教育委員会編『八戸の神楽』1982 21頁－22頁
- 事例②夏井大梵天神楽
- ・ 夏井大梵天神楽保存会『大梵天神楽』1997 60頁－63頁
 - ・ 岩手県教育委員会『岩手県の民俗芸能－平成7年度民俗芸能緊急調査－』1997年 60頁
- 事例③高屋敷神楽
- ・ 一戸町教育委員会『一戸町の郷土芸能』1992 64頁
- 考察
- ・ 本田安次『本田安次著作集 日本の伝統芸能 第5巻』錦正社 1994・508頁・499頁引用
 - ・ 森口多里『岩手県民俗芸能史』錦正社 1971 1331頁

参考文献

- 岩手県教育委員会『岩手の民俗芸能 念仏踊篇』1965
- 森口多里『岩手県民俗芸能史』錦正社 1971
- 八戸市教育委員会『八戸の神楽』1982
- 岩田勝『神楽源流考』名著出版 1983
- 一戸町教育委員会『一戸町の郷土芸能』1992
- 本田安次『本田安次著作集 日本の伝統芸能 第5巻』錦正社 1994
- 小形信夫編『民俗芸能ノート第三号奥州南部神楽史料集』東日本ハウス文化振興事業団 1995
- 播磨福蔵『大梵天神楽』夏井大梵天神楽保存会 1997
- 宮古市教育委員会編『陸中沿岸地方の周り神楽 報告書』1999
- 相馬福太郎『二戸の神楽』沢倉印刷株式会社 2004
- 佐藤信夫『八つ口神楽』2004
- 菊池和博『東北の民俗芸能と祭礼行事』清文堂出版株式会社 2017

（なかしま なつこ 共同研究嘱託研究員／佛教大学非常勤講師）